

# 図書館だより

都城工業  
高等専門学校  
図書館

No.74

FEBRUARY 2014



「島根県 かもす 神魂神社」

**特集**

校内読書感想文・読書体験記コンクール  
入賞者発表

都城工業高等専門学校  
Miyakonojo National College of Technology

## 「書く」ということ (Ⅱ)

図書館長 望月高明 …………… 1

## なぜ本を読むのか

一般科目(理科) 黒木藤夫 …………… 4

特集

## 校内読書感想文・読書体験記コンクール 入賞者発表

校内読書感想文・読書体験記コンクール入賞作品 …………… 5

### 講演「経験や自然から学んだこと」

講師 元熊本高専校長 宮川 英明氏 …………… 17

## 今年度の活動と図書委員会への在り方について

学生図書委員長 電気情報工学科 榎田 宗丈

副委員長 機械工学科 山中 康成 … 19

ブックハンティング実施される …………… 20

ブックハンティングで購入した図書一覧

図書館からのお知らせ …………… 22

図書館開館予定

学年末・春季休業期間中の長期貸出について

編集後記

### ●表紙「島根県 <sup>かもす</sup> 神魂神社」

島根県松江市大庭町にある。「大庭」という地名は、「神様の祭りごとをする場所」のこと。古代出雲の中心地であった「八雲立つ風土記の丘」から徒歩10分ほどの森の中に静かに佇む神社だ。

神魂神社は、「出雲国造(いずものくにのみやつこ)」の祖先である、天穗日命(あめのほひのみこと)が創建したとされている。

現在の本殿は、室町時代の初期(1346年)に建立された。三間四方の建物は四丈の高さで、出雲大社の本殿とは規模を異にする。が、床下が高く、柱は太く、とくに宇豆柱が壁から著しく張り出していることは、古い大社造の特徴をよく残している。現存する最古の大社造として、昭和27年に国宝に指定された。

本殿内は、狩野山楽土佐光起の筆と伝えられる壁画九面にて囲まれ、天井は九つの瑞雲が五色に彩られている。

広大な森を背後にした古色蒼然たる社は、神秘的で厳かである。

撮影 図書館長(一般科目) 望月 高明



# 「書く」ということ (Ⅱ)

図書館長 望月高明

## 二 承前

陽脩の文は、これを裏から解釈すると、「三多」を欠いては真っ当な文は書けないことを意味している。例えば夏目漱石（その他、福沢諭吉でも、内村鑑三でも、その他誰であってもよい）を理解しようとしたら、彼の作品を読む以外にない。漱石の作品を読むことを措いて、他に方法はない。このことは唯一にして絶対の途であるといつてよい。このことは断言することができる。漱石を理解するのに、その作品を読む以外に方法がないのであれば、われわれは何れともあれその途を歩むより他はない。そして、その途を歩まない限り、漱石にとってわれわれは「縁なき衆生」に他ならない。私達は永遠に（然り、永遠にである）漱石から一顧だにされぬ人間にすぎないのだ。私はすぐ上で「三多」を欠いては真っ当な文は書けないと言ったが、果たして右の漱石の例のごとく、「三多」説が文章作法上、唯一にして絶対の途であるかは正直のところよく分からない。あるいは文章作法においては、「三多」説以外に他に有力な方法があるのかも知れぬが、今言ったように私にはよく分からない。ただ、この「三多」説は陽脩のごとき宋代の代表的な文章家の言葉だけに、千金の重みがあることは疑いない。また、私の貧しい経験に徴しても、「三多」説が文章作法に限っていても有力な方法であることは争えない。かくのごとくであるとすると、この「三多」説は自分の文章作法上の「自己診断」の機能を担うといえないであろうか。もし小文の読者が“ どうして自分は文章が上手に書けないのだろう ”、“ どうして感じた通りに表現することができないのだろう ”などと悩んでいるなら、わが身にこの「三多」説を引き当てて自己診断を試みてはどうだろうか。

## 三

そういう次第で、行論上、以下に「三多」説に基づいて私自身の自己診断を試みようとしよう。初めに「看多」であるが、私は自分の来し方を振り返ったと

き、果たして「看多」に努めてきたであろうか。どうも<sup>ひいき</sup>最真目に見ても万巻の書物を読み去り読み来たったということができない。（例えば哲学者三木 清の「読書遍歴」を見てみよう。そうすれば、彼がその若き日に既にどれほど膨大な量の書物に目を曝していたかが明らかになる）。私がそこに見出すのは、その時々<sup>に</sup>世の読書子の話題に上がった書物ですら忠実に読む努力を怠った、一生涯中途半端な読書しかしてこなかった者の姿にすぎない。その時々において人々の関心を惹いた書物ですら忠実に読んでいないのであるから、私が文学部出身者としていかなる領域を専攻するにしても、そのバックボーンを形成するところの基礎的な文献を読んでいないことは覆うべくもない。そして、今となつてはもはや後の祭りであるが、このことが現在の私の学問研究をいかに貧弱なものにしているかは、否定することのできない事実である。ともあれ、ひとまず自分の専門に限っていうと、朱子学を大成した朱熹（1130～1200）という人は、その生涯において実に膨大な書物を物している。例えば、『朱子文集』121巻、『朱子語類』140巻、その他。彼の著書は固よりこれに止どまらないが、『朱子文集』121巻に限っても、これがすべて朱子という一箇の人間によって確かに書かれたのだという事実<sup>に</sup>思いを致したとき、宋学の主体である士大夫＝読書人という存在類型の一の極限的位相がそこには確かにある。それでは、私は『朱子文集』を全巻にわたって読んだことがあるかという、否である。それでは『朱子語類』140巻は……？否である。この一事を推しても、私の読書などは高が知れているのである。それにもかかわらず、朱子学・陽明学について何事かを語ろうとしているのであるから、これはもはやパロディーでしかない。

次に「做多」についてはどうであろうか。これは前の「看多」より一層判然としている。試みに私がこれまで発表してきた著書・論文の類をすべてかき集めてみたら、それですべてなのである。それらが質的には固より、量的にいつてもどれほど貧しいものにすぎないかは、私自身が最も承知している。そして、私という存在は今ある者でしかない。私とは現在のその貧し

い成果しか生み出し得なかったところの者に他ならず、それ以外の者ではあり得ない。時間的様態でいうと、即今現在の状況こそが私自身なのであって、ここでは自分とは過去のそれでもなければ、未来（将来）のそれでもない。

ここでの主題は「做多」であるから、私にとって「書く」とはどういう行為かということに関説しておこう。私は宋明の儒学思想を研究しているが、その展開面として朝鮮における朱子学の展開、また幕末維新期における朱子学・陽明学の展開についても関心をもって研究している。東洋の学問の特色は孔子の昔から「述べて作らず」（『論語』述而）にある。その意味は、「述ぶとは、旧を伝えるのみ。作るとは、則ち創始なり」という朱子の注を参考せられたい。この場合、「述べる」というのは「作る」の対概念であって、「作る」が創作であるのに対して、「述べる」は祖述である。儒学の開祖である孔子がこのようにその初めにおいて自己の立場を「述べて作らず」と規定したことは、その学問の性格、根本基調 というものを深いところで決定づけたことは、ほとんど疑えない。それとは対照的に、自然科学の分野においては独創的であること、オリジナリティーということが非常に重要視されている。であるから、論文を公表するに際して、その学説がこれまで誰も指摘したことの無いような創見が歓迎され、また技術においては「世界初の技術……」などという記事が新聞の紙面を賑わすこととなる。その分野においては、公表する論文にどれだけインパクトファクターがあり、その論文が研究者によって何回引用されたかということがその価値を決定する評価軸とされる。自然科学系の論文のかかる傾向には様々な要因が考えられるであろうが、その一つに新しい知見の提示が新しいイノベーションの興隆を促し、それが延いては国家的レベルにおいて莫大な財をもたらす潜在的な可能性を秘めていることがあげられることは争えない。それ故、そういう可能性のある分野には惜しげもなく資本が投入され、多くの研究者が成果を競ってしのぎを削る。その結果、他に先駆けて発表された独創性の高い研究成果にはマスコミは固より、世界中の耳目が注目するが、二番手のものほとんど反故同然の扱いしか受けない。自然科学系の論文においてタイムラグがやかましく言われるのはそのためである。

一方、私の専門分野においてはその様相は自然科学のそれとはずいぶん異なっている。固より東洋の学問に

においても独創的であること、オリジナリティーということが要求されないのではない。ただ、私が研究している分野について、かつて誰も触れたことのない未開拓な問題について自分が論及しているなどと考えたことはない。私が研究している領域は、私以前に既に多くの先人たちによって開拓されており、また、当該の資料や文献についてはほとんど研究し尽くされていて、新発見のものなどよほどでない限りあり得ない。このように、私の研究対象は既に多くの先人によって歩まれてその足跡が鮮明に残っており、濃厚にその息遣いが感じられるところである。それは決して孤独の道ではなく、多くの先人によって開かれた大路なのである。しかし、私とその道を歩もうとすると、私の前途はそこだけ雑草がはびこっていて、それを刈り取らないでは一步も前に進むことはできない。私にとって「書く」という行為はそういうことに他ならない。その研究領域は私以前に多くの先人によって歩まれた「古道」であるから、私が言及したことなどはかつて先人の誰かが指摘したことかも知れない。しかし、そのことを後に知った私は「しまった、既に……」などとは決して思わない。むしろ、私は研究の途上においてゆくりないその符合に、故人に出会ったような喜びさえ覚える。宋明の学者は学問とか学問することにおいて「自得」ということをやかましく言うが、それは右に述べたような消息を指していった言葉であると思う。なお、孔子の次の言葉は東洋の学問の性格、根本的基調というものを一言の下に喝破している。すなわち、「古の学者は己の為めにし、今の学者は人の為めにす」（『論語』憲問）。孔子の言葉は原文でわずか十二文字の、文字通り片々たる文にすぎない。しかし、宋人が自己の学問の成否を占う試金石としてその言に深淵的な含蓄を見出したことは、朱子の『論語集注』などに徴すれば判然とする。なお、右の孔子の言葉の解釈は読者の深き心に委ねたい。

#### 四

次に、「商量多」についてはどうであろうか。私が論文を発表して常々遺憾に思っていることは、自分の思索が実に皮相浅薄なところに止どまって、一向に深まっていかないことである。私は思想家の文章を読んでいて勝手に自分のイメージをこしらえているけれど、実際にはその真実の相は自分の想像も及ばないよ

うな相をしているのではないだろうか。こういう疑懼の念は常に私の脳裏を離れることがない。朱子はある文の中で、夜中机に向かっていて鐘声を聞いていたが、一つの鐘の音が鳴り終わらぬ中に、心は既に別のことを考えているとあって、自分を戒めている。われわれの心は一つのことをどこまでも忍耐強く思索し続けるには余りに不安定で、外界の事象に応じて散乱していくものらしい。(なお、「商量多」については平生からその欠落に私自身忸怩たる思いがあって色々と考えていることがあるが、紙幅の制約もあってこれ以上言及することはできない)。

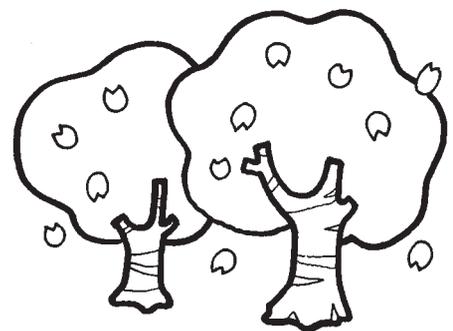
以上、陽脩の「三多」説に基づいて「自己診断を」試みたのであるが、私がそこに見出すのは「三多」を実践してこなかったという冷厳なる現実には他ならない。私が事実として「三多」を欠いている以上、真っ当な文を書けないことなど、蓋し当然のことではなければならない。仏教に「自業自得」という語があるが、これは正しく自業自得なのである。むしろ、このように「三多」を欠いているのに真っ当な文を書けると思っている方がよっぽどどうかしている。文章作法に限っても、その努力を怠ってきたのに真っ当な文章を書こうと思うのは、よほど押しが強いというものであろう。それはある品物を購う財力もないのに、デパートのショーウィンドーに陳列してある高級品をいつまでも欲しがっているのに似ている。その品物を買いたいだけの財力が自分になら、すっぱりと求めることを諦めるしかないのである。いつまでもショーウィンドーの前に立って物欲しげに指をくわえて夢想し続けても、何も始まらないのである。どうしてもその品物を手に入れたいなら、せつせと勤勉に働いてそれを購うだけの経済的な実力を付ける他はないのである。

このように、「『書く』ということ」という表題で何か述べようとすると、私の現実を反映して、それは「……………することができない」という否定的な表現を伴わざるを得なかった。私にとって文章を書くということは、それほどまでに困難なことなのである。すぐ上で述べたごとく、このことは文字通り自業自得なのであるから、私は「三多」の実践を怠ってきたという必然的な結果を素直に受け入れるより他はないのである。

もっとも、ここまで読んできて小文の読者はその余りに否定的な論調に、「何だ、これではいつまでたっても文章などうまく書けないではないか」と思うかも

知れない。あるいは「そんなことでは、文章修業にいくら励んだって終わりが無いではないか」と言うかも知れない。しかし、私はいたずらに自分の文について否定的な表現を使っているのではない。それが私の現実には他ならないからである。仮に諸君が志賀直哉のような明晰な文章を書きたいと思うなら、彼の主要作品に止どまらないで、その断簡零墨に至るまで読む必要があるであろう。『志賀直哉全集』を繰り返し繰り返し読むのだ。そして、次に彼の文体を意図的に真似て文章を書いてみよう。「真似る」というと何か一段価値が低いように思われがちだが、「学」という言葉にはそもそも人の真似をするという意味がある。そういう反復の過程でやがて「型」というものが自ずと形成されてくるのだ。むしろ、現在のわれわれは文章作法上においてそういう「型」というものを持たないことが最も問題であると思う。そういう「型」を持たないで文章を書こうとすれば、それがどれほど行路難であるかは思い半ばに過ぎるものがある。顔にできた染みや皺ならば、化粧や皮膚の手術などによって一時的に糊塗することができるかも知れない。しかし、文章を書くことにおいてはそういう小細工は一切通用しない。一切合財、赤裸々な自分、正味な自分をそこにさらけ出すことになる。小は漢字のイロハ、語彙力から、大はその人の教養の質、思索の透徹度、果ては人間性までもが隠れもなく露わとなるのである。いわば文章を書くことにおいて、集中的に全存在可能性が問われているのだ。

以上、文章を書くことについていろいろ述べてきたのであるが、私と異なって小文の読者である学生諸君は幸い春秋に富んでいる。諸君が私を反面教師として「三多説」を若い中から実践して真っ当な文が書けるよう祈念したい。



# なぜ本を読むのか

一般科目（理科） 黒木 藤夫

この3月に退職するにあたって図書館便りの原稿を依頼されたので本を読むことの意義を自分なりにまとめる機会としたい。

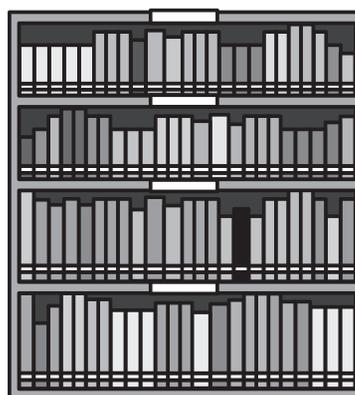
「なぜ本（文字）を読むのか」に対する答えは一言でいえば「豊かで充実した人生を送るため」とでもいえよう。

第一に、人は働かなければ生活していけないのだから、自分の仕事を責任を持ってやり上げなければいけない。その為には、その仕事に必要な知識と技術をしっかりと自分のものにしなければならないので本を読んで力を付けるという面があると思う。生活がしっかりしてくればおのずと（働くことだけが趣味という人は別として）自分の趣味に目が向くはずだ。例えば旅行が趣味の人について考えてみる。奈良を旅行している時、お寺の鐘がゴーンと鳴ったとする。ある人はただ「鐘が鳴ったなー」とだけ思い、ある人は「ああひょっとするとこれは正岡子規が寺を散歩した後 休憩を取った茶屋で出された御所柿を食べているときに鐘の音を聞いて〈柿食えば 鐘が鳴るなり 法隆寺〉と詠んだ鐘の音と同じものかな」などと思ったとする、どちらがより豊かな旅ができるのかは改めて言う必要もないだろう。その土地の風土や歴史人情などより多くの情報を持っていれば更に充実したものになることは明らかだ。これ等の情報は基本的には「読む」事で自分のものにする訳だからよく読む人とそうでない人の旅の充実度はおのずと違うであろう。何年か前、政府の教育関係の諮問委員をしていたある小説家が「二次方程式の解法を知らなくても生活には何にも困らない」という話題になったことがあった。確かにそういう人もいるかもしれないが、これはまさに、諺で言う「蟹は 甲羅に似せて 穴を掘る」そのものだろう。知らなくても生きていけるが知っていればもっと豊かに生きていけることに思いが至っていないと言えはしないか。

第二に、本を読むことで多様な人生を疑似体験できるという面があると思う。「人生50年」と言われた時代からすると人の一生は随分長くなったが、それでも自分一人で経験できるものは限られている。読むこ

とで他の人の人生を疑似体験できるわけである。「本（小説・伝記等）」には登場人物がどのように生きたかが必ず描かれている。それを読む中で、自分として共感を持つところそうでないところを振り分けいくはずだ。そして、その経験の中で自分はこうありたいというものを掴み、そういう生き方に近づこうとするはずだ。私の加入している数学の研究団体の標語のひとつに「学ぶことは まねること」というのがある。赤ちゃんの言語習得しかり、スポーツでの技術獲得しかり、先生としての力量を付けることしかりで 良きモデルに向かって行動する（まねる）ことが学ぶことの基本だ。従って、その良きモデルを見つけるために「本を読む」必要性が出てくる。

ちょっと硬いことになりましたが、そんなことばかり考えて読んでいるのではありません。大部分は「楽しいから読む」「読めば楽しい」からです。読むことはすべての基礎です。基礎の部分が大きいほど立派な高い建物ができます。学生のみなさん大いに本を読みましょう。



# 校内読書感想文・読書体験記コンクール入賞者発表

## 平成 25 年度校内読書感想文読書コンクール入賞者

『沈黙の春を』読んで……………	機械工学科	第 1 学年	持留 駿喜
『地獄変』を読んで……………	電気情報工学科	第 1 学年	清家 竜司
生きる意味－『砂の女』を読んで ……	物質工学科	第 1 学年	川崎 夏鈴
『ノルウェイの森』を読んで……………	建築学科	第 1 学年	行久保里奈
『みんなの海、わたしの海』を読んで……	機械工学科	第 2 学年	坂元恭太郎
『白痴』を読んで……………	電気情報工学科	第 2 学年	宮崎愛美麗
『枕草子』を読んで……………	物質工学科	第 2 学年	上木崎涼香
『風立ちぬ』を読ん……………	建築学科	第 2 学年	尾前 楓
『小さな者へ』を読んで……………	機械工学科	第 3 学年	下出 哲大
『坊っちゃん』を読んで……………	電気情報工学科	第 3 学年	小松晋太郎
『沈黙の春』を読んで……………	物質工学科	第 3 学年	長倉 小桃
『異邦人』について……………	建築学科	第 3 学年	川畑 里歩

## 校内読書感想文コンクール入賞作品

### 『沈黙の春』 を読んで

「人間自身が創りだした悪魔が、いつか手におえないべつのもに姿を変えてしまった。」とアルベルト・シュヴァイツァーは言っていた。

私はこの言葉の「悪魔」というキーワードについて考えてみた。

作者はこの本の冒頭に具体的な悪魔による影響の例について書いている。それは若鶏のわけのわからぬ病気があったり、羊の病気や人が突然死んだりという自然の沈黙だ。残念ながらこの悪魔の影響である自然の沈黙は、一つの町で起きていることではないのだ。多かれ少なかれ、このような禍いは世界中で起こっている。

この悪魔にはっきりとしたひとつの形があるわけではないが、悪魔を生んでしまった原因は人間であることに間違いはないだろう。それは殺虫剤や除草剤という化学薬品だ。

私はここで、なぜ人間が自然を沈黙させるほどの悪

### 1 年 機械工学科 持留 駿喜

魔を生み出してしまったのか気になった。その疑問には、この本の書かれた時代のアメリカの自然界における変化と、現代社会の経済活動、人々の心理がヒントになると思った。

まずこの本が書かれたのは第二次世界大戦後である。この当時、アメリカでは核実験が盛んに行われていた。また化学戦の研究を進めるうちに、殺虫力の高い化学薬品が多く見つかった。しかし、それは偶然見つけたものではなかった。もともとは人間を殺そうと、たくさんの昆虫がひろく実験台に使われたためである。その化学薬品はもともとの生産量をたった十三年で五倍に増加させた。そこで作者は、放射能による汚染と化学薬品による影響について警鐘を鳴らした。それは、科学技術を進歩させた人間が、これまでにないほどの影響力を手にし、自然を大幅に変化させているにもかかわらず、人間はその影響力の大きさに気づい

ていないというものだった。

しかし、世の中にその警鐘に耳を傾け、真剣に考える人は少なかった。なぜなら、化学薬品が経済の潤滑油となり、普段の生活がとても住みやすくなったため、化学薬品の影響の話など気にならなかったからからである。

普段の生活を住みやすくするための例として害虫駆除と除草がある。そのよりよい生活に邪魔な昆虫と植物を手ばやく駆除するために、たくさんの化学薬品が使われてきた。ここではそれらの化学薬品が有害かどうか、環境汚染につながらないかどうかを問題にしてみたい。

「殺虫剤や除草剤は、昆虫や植物にしか害を与えない。」このような話をよく耳にするが、実際は違う。例えば一種類の昆虫を駆除するために撒いた殺虫剤は、ゆっくりと地面にしみ込んでいき、海や川への長い旅路につく。

これはたった一つの例だが、この例が重なっていくにつれ、大規模な汚染につながっていく。その結果、私たちはおびただしい水を前に深刻な水不足に悩んで

いる。

ここまで考えてみて、この感想文の最初に書いたアルベルト・シュヴァイツァーの「手におえない別のもの」の言葉の意味がようやく分かった気がする。

それは、人間中心主義（つまり人間だけが生存する権利をもっているという考え方）を主張しすぎたために生み出された悪魔（自然界における食物連鎖にともなう有害物質の生物濃縮）が、食物連鎖の頂点に位置する人間の存亡をも脅かすというものだと思う。

人間は、地球の環境があつてこそ生きていけるのに、自分たちの生きていく場所を壊している。それは世代間倫理（現代の世代は、未来の世代に対して、責任をもつという考え）と全く別のことをしている。つまり、今までのような考えでは私たち人間の明るい未来はやってこないということになる。

「地球は一つの宇宙船である。」

と、バックミンスター・フラーが提唱したように、限りある資源の適切な使い方を、未来のためにしっかり考えていかなければならない。

## 『地獄変』を読んで

「地獄変」、まさにそれは地獄を目の当たりにして描かれた屏風だと思う。

良秀という男は、人情が無く恥知らずで強欲で、しかも本朝第一の絵師だと自分で思っている。実際そんなのかもしれない。だからこそ、誰も描けないようなあの「地獄変」を描くことが出来たのだろう。でもそれは、自分の娘を犠牲にしてまでも描く価値があったのだろうか…。良秀がどんな高名な絵師で情も恥もない男であろうと、血の通った人間であることは確かだ。それなのに、あの炎熱地獄の中縛られたまま、肉を骨を髪を焦がして苦しみいく、愛する娘を描くことがどうして出来たのだろう。その時の父親である良秀の心情がどうしても分からなかった。しかし、横柄で高慢な一人の絵師良秀としてならば分かる気もする。「地獄変」を描くためなら、弟子達を死に目に合わせる程の男なのだから、この時も何のためらいもなくただ一心に描くことは出来ただろう。それとも、この地獄のような光景を目の当たりにし、一瞬にして気が変になり、どうすることも出来ずに勝手に筆だけが動いてし

### 1年 電気情報工学科 清家竜司

まったのかもしれない。多分そうだと思う。私は、良秀という男は情も無く心底悪い男だとは思わなかった。それは、娘が大殿様の側に仕えているのを辞めさせようとしたことなどから、娘に対する愛情が不器用だが感じられたからだ。

そう、良秀は大殿様がどんな男なのか感じとっていたのかもしれないと思った。大殿様は下の者達のことまで考える大器量の持ち主だったため、老若男女問わず神か仏の再来のように扱われていた。私も最初は、大殿様は皆に慕われ、心も優しい人だと感じたので、娘は良秀の下ではなく、大殿様の側で仕えていることが一番幸せだと思っていた。しかし、大殿様が娘を御意に従わせようという評判が立つなどしたことで、少しずつ私の中で大殿様は一体どういう男なのか、もしかしたら、偽善者なのかもしれないと思うようになっていった。大殿様が良秀にあの「地獄変」を描くよう命じたのは何故だろう。その真意は何だろうと考えてみた。

良秀なら絵師として自分が一番であるというプライ

ドもあり、納得のいく「地獄変」とことん描くだろう。前にも書いたが、そのために弟子達は大変な目に合い、愛する娘までも犠牲にしてしまったのである。大殿様はそういう良秀の性格を知っていたからこそ、良秀に描くよう命じたのだと思う。しかし、猛火の中で悶え苦しむ女を「娘」に決めたのは、もうこの時だったのだろうか。だとしたら、やはり自分の意に従わない娘とその父、良秀に対する戒めのつもりでしたのだろうか。そう考えると、大殿様はとても恐ろしい男ではないかと思った。燃えさかる火の中で苦しんでいるであろう娘を良秀と大殿様は目をそむけることなく見ていた。しかし、その二人の表情からは歴然と違いが伝わってきた。良秀は現実を受け止められずぼう然と見ていたのに対し、大殿様は、良秀の顔色をうかがいつつ娘の苦しんでいく姿を見ていたのだ。私は良秀と娘が哀れでこの時の二人の思いを考えると、本当にやるせない気持ちになった。そして大殿様は血も涙もない人間なのではないかと思えた。

この本の中で気になったのが猿の猿秀である。娘が大変可愛がり、猿秀も娘になつていて、最後、娘のいる火の中に飛び込んでいくのだ。猿秀は良秀の代わ

りとなって今まで娘を見守ってきたのではないかと思った。良秀は、絵を描くために何もかも犠牲にしてしまうところがあるが、娘を思う気持ちは人一倍あり、そのうまきは伝えられない思いの一部を、猿秀が娘に伝えてくれる役目を果たしてきたのではないかと思う。良秀の心から抜け出た良秀の一部だったのではないかと思った。

良秀は「地獄変」を完成させ自ら命を絶つ。周囲からは自分の娘を犠牲にしたと冷たい目で見られ、改めて哀れで悲しい生き方をした人だと思った。「地獄変」を描くために、弟子でも他の誰でもなく、最後は自ら地獄を見ることになったのだ。何とも言葉に出来ない思いがした。しかし、絵師としては今までで一番の仕事をしたという思いがあったのかもしれないが、誰も肯定はしないだろうと思った。

私はこの小説を何度も読み返した。作者は何を伝えたかったのだろうか。「生き方について」だろうか。良秀のように、最高の絵を描くためなら、たとえ何かを犠牲にしても命を懸けて作り上げるというような、芸術作品を作る人の強い思いを伝えたかったのかもしれない。

## 生きる意味 — 『砂の女』 を読んで

1年 物質工学科 川崎夏鈴

『砂の女』は、教師である男が現実から逃れようと、昆虫採集のために来た砂丘で、砂穴に埋まってゆく部落の人々により、ある一軒家に住んでいた女とともに閉じ込められ、部落のために砂かきを強いられる話である。

男が昆虫採集をしていたのは、新種を発見するためであった。発見すれば、男の名が昆虫大図鑑に半永久的に刻まれるのだ。私は、男が自分の存在理由を探していたのだと考える。私も男のように考えた時があった。毎日同じような日常の繰り返しを過ごしていると、なぜ私はここに存在しているのだろうと思うのだ。人はみなそうだと思う。人が存在理由を探し、そこで光を見つけることで、人は存在していると感じることができるのだ。

また、人は時間や勉強などあらゆるものに縛られている。しかし、人は縛られることから逃れようとはしないのだ。縛るものがなくなると人は不安や孤独を感じるのだろう。だから、人は縛るものにしがみつくの

だ。男はしがみつくなかった日常から逃れようと訪れた砂丘で、なにからも縛られず自由に流動する砂に魅せられたのである。砂はただ流れに身をまかせて動いている。男はこの砂の魅力にとらわれ、存在することから生きることを最後は選ぶのである。生きるとは、ときには流れに身をまかせながら、縛られることだと思う。生きることを日常におきかえると、意味の形成だと思う。今その人が何をしたいのかは自由である。そんな自由な社会の中から生きる意味の形成をおこなっていくのである。だから、人は生きてこそ自分の存在を感じられるのではないだろうか。

『砂の女』を読み進めると、砂とともに部落で生活していることが現実に思えてくる。しかし、『砂の女』に現実には存在しないと考えられる。だが、現実ではないはずの部落での生活を、男は現実に変化させたのである。男にとって部落での日常は、砂かきをすることである。また、日常の砂穴から脱出しようと部落の人々に様々な抵抗を試みるのだ。男の生活は、まさに生き

ることを感じていたと思う。そこに、男の光となった溜水装置の存在で、男は現実より現実らしい生活を部落で送っていたのだ。だから、男は最後に逃げる好機がめぐってきても砂穴に留まったと考える。男は日常も光もある部落で生きているのだ。私は男の行動により大切なことに気づいたのである。それは、あらゆる状況の中で生きがいを見つけることだ。ただ日常を生きるだけでは、男が何度も部落から脱出するように、私も日常から逃げ出したくなるのだ。人は日常の中に生きがいを見つけてこそ、日常の中で生きていくと感じられるのだと思う。男にとっての生きがいが溜水装置だったように、私も今の日常の中で生きがいを見つけない。見つけることができれば、日常から逃げださず生きられると思う。

私は、『砂の女』を読み始める時、女を視点にした物語りだろうと思ったのである。だが、読み進めると男を視点にしたものだったのだ。私はなぜ著者が「砂

の女』としたのかに疑問をもったのである。『砂の女』は、砂の中で男が日常で生きがいを見つけていた。しかし、私が男に大切なことを気づかせてもらったように、男も一緒に日常を過ごしていた女に気づかされたのではないだろうか。だから、著者は「砂の女」としたのではないだろうか。砂穴での生活の中で、男にとって女の存在は大きなものだったと思う。また、女にとっても同じだったのだ。砂穴の中で男と女は、二人で生きがいを見つけ、生きていたのだ。

生きる意味とは何だろうか。私は世界は砂みたいだと思う。私たちの生きる世界は待つはくれない。常に世界は、流動している。だから必死になり、もがき逃げたくなるのだ。しかし、逃げないで生きがいを見つけ、生きてゆきたい。流動している世界の中で今を大切にできる人になりたい。私はこのことが生きる意味だと思う。

## 『ノルウェイの森』を読んで

この本を読み終わったとき、私の頭の中にはいくつかの疑問と、なにかすっきりしない何かがポツンと存在していた。まるで最後まで犯人が分からなかった推理小説を読んだ後のようだった。なぜ直子はワタナベのことを愛せなかったのか、最大の疑問であった。愛してはいなかったが、直子は確かにワタナベのことを求めていた。自分がいるコッチの世界と、正常なアッチの世界を繋ぎとめるために直子にはワタナベが必要だったのだと思う。しかし最後には結局、自殺した最愛の恋人キズキのあとを追うようにして自ら命を絶った。この物語は、ワタナベ目線で事が進んでいるため、直子の正確な気持ちの描写がない。直子の本当の気持ちは誰にも分からないのだ。私がこうやって書いている直子の気持ちも、所詮は想像に過ぎない。我々はこの本を通して直子の気持ちを想像することしかできないのだ。

私は、この物語は文中にもある「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している。」という言葉テーマにしてつくられていると思う。なぜなら、作者が死を当たり前のようにさらっと簡潔に、しかも唐突に書いているからだ。キズキの死もハツミさんの死も、愛する直子の死も。死は、なにも特別なことで

1年 建築学科 井久保 里 奈

はない。生まれてくると死ぬこととは似たようなものだというを実感させられた。実際、一日のうちに何万人もの人が死に、また何万人もの人が生まれる。今日もどこかで誰かが死んで、どこかで新しい命が生まれているのだろう。しかし、頭ではそのことがちゃんと理解できていても、現実はやはり違うものだと思う。人が死ぬと、誰かが悲しむ。大切な人が死んで、「死ぬことは当たり前で避けることは出来ないのだから仕方ない」とキツパリ割り切れる人があるだろうか。少なくとも私なら無理だ。きっとワタナベのように泣き喚くだろう。そして何度も何度も、その人のことを思い出さるだろう。大切な人がもうこの世界には存在せず、一握りの灰になってしまったという事実を受け止められないと思う。受け止めるにしても、相当な時間がかかるだろう。だが、そういうものなのだ。生きていくからにはいつか死ぬのだから、私達はこの悲しみを乗り越えて生きていかなければならない、死んだ者の分まで。その人が死ぬまで生きたかった「明日」を、もうその人は世界に存在しない「明日」を、私達は生きていかなければならない。そうやって強くなっていかなければならないのだ。限りない喪失と再生のなかで。

『ノルウェイの森』は、人の心の震えや感動、そして哀しみを淡々と切ないまでに描いた作品である。初めてこの本を読み終わったとき、またすぐ読み返し、映画版も見た。もっとこの物語を理解したいと思ったからだ。何度読み返しても飽きることはなかったし、そのおかげで物語に入り込むことができた。そして思った。この物語は生の世界と死の世界が対照して存在しているのだと。ヒトとコミュニケーションをとるのが苦手な直子と、容易にヒトと接してコミュニケーションがとれる緑。直子の死の世界にいたワタナベは、

生の世界にいる緑との出会いで、生の世界の素晴らしさを知り、最後には直子のあとを追って死ぬことをやめ、生きることを選んだのだ。直子と違い、ワタナベに希望を与えることのできる緑は、この物語において最も大事な人物だったのかもしれない。

最後に、私はまだこの本を完璧に理解できていない。それはまだ私が十六歳だからということもあるだろう。だから私は、大人になって、人生に行き詰まることがあったら、もう一度この本を手に取り、読んでみたい。

## 『みんなの海、わたしの海』を読んで

2年 機械工学科 阪元 恭太郎

あなたの住んでいる町や村の海は綺麗ですか。ごみ一つ落ちていない澄んだ海ですか。私の町の海は綺麗だとは言えません。波打ち際には、家庭用ごみ袋、発砲スチロール、他国のペットボトルや食品など、たくさん散乱しています。そのせいで、海の生態系も少なくなっており十年前にいた魚や生物はもういません。原因は、八割近く“人災”だと言えるでしょう。私が読んだ『ていだかんかん』という本は、美しかった海をサンゴの人工産卵を通して、取り戻していくというお話です。この本を選んだ理由は、現代の問題点にも掲げられている、環境破壊に着目し自分の町の海と合わせて考えなおしたいと思ったからです。私は以前、サンゴについて調べたことがあります。祖母に話を聞くと、今の海は昔の海より遥かに汚れてしまったと言いました。そして、私の町の海にもサンゴは生息していることも調査で分かりました。現在では白化しておりサンゴがまだ生きているのかも分かりません。この本の話は今の私の町と同じように、昔の綺麗な海に戻そうと主人公の健司が、サンゴの人工産卵に挑むのですが、今の海で環境で卵を産ませる事に挑戦する人は事例がなく、色んな人に反対されたり、金融会社に騙されたりと苦難ばかり起こってしまいます。その時に健司の力になったのは、周りの友達や家族の力でした。そして、健司は見事にサンゴの人工産卵を成功させるのですが、ここから分かった事は誰もした事がないような事や、無謀と言われた事にチャレンジする事ってやっぱり大事だなと思いました。私は都城高専に入学する時に、掲げた目標が何事にもチャレンジする事でした。今やっている仕事は、保体委員長をしています。

三年後までには、自分でこれをしたというのを決めて、チャレンジできればいいなと思います。それと、周囲のみんなの協力はすごく大事だと思います。私もこれまで色々な困難にぶつかったけど、救ってくれたのは間違いなく周りの協力でした。だから、これから辛い事やきつい事があると思います。逆に、他の人がそういう状態にある時は自らが動いて、人の支えになれるようにしたいと思いました。

この本の中で、健司が壁に貼ってあるポスターを見ながら、こう話す場面があります。

「みんなの海なら、僕の海だよ」と。

私は、この言葉を逆に考えて、自分だけの海ではなく町のみんなが楽しく使う海だと思いました。

「自分だけなら、ゴミ捨ててもいいや」

とか、そういった考えを一人でも持ってしまうと、絶対に海は綺麗になりません。むしろ汚くなる一方だと思います。先ほど話しましたが、海が汚れる原因として大きいのが“人災”です。その実態を、全国民が知らないと思えます。対策としては、今言ったような事を、何らかの形で全国民に浸透させること、昔の海と今の海を比較し一人ひとりが、考えなおす事など考えられると思います。話は少しずれますが、地球温暖化の原因もCO<sub>2</sub>の増加、森林伐採などやっぱり人の活動が原因に挙げられます。それなら、地球温暖化を防止できるのも、海を綺麗にできるのも人間の力だと思います。小さな事からでも全然良いと思います。海で遊んだ後に、みんなでごみ拾いをするとか、当たり前なことだけど、自分で出したゴミは自分で持って帰ることから、始めるのも良いかもしれません。

私は祖父から、  
「昔は今よりもっと綺麗な海だったんだよ。」と言われました。今度は、私が未来の子供たちに言えるように、今回読書感想文という形で考えた事を、実践して昔のような海に戻りたいです。そして、何十年後かは「昔はすごい汚かったけど、今はすごい綺麗だね。」と、言い合えたらいいなと感じました。



## 『白痴』を読んで

狂気の沙汰。主人公達の関係はまさにそれだった。しかし、そんな主人公達の関係の描写ほど私の心に印象深く残った。狂気の沙汰ほど面白かった。

主人公のマイシュキン公爵は、私が今まで読んだ本の主人公の中でも特に人間味身が無いように感じた。終始“白痴”と言われつづけ、最後には本当の意味での「白痴」となってしまう彼は、上手に言い表せないけれど、とてもきれいな人だという印象で終わった。周りの登場人物達が彼に心惹かれるように、私も彼の言動には惹かれるものがあった。スイスでの哀れな娘の話、処刑の話、貧しさゆえの殺人者の話、と物語自体にはあまり関係が無いような話一つ一つも興味深く、どれも印象に残るものであった。しかし、私は惹かれはしたものの公爵のことが最終的にあまり好きではなくなった。彼を見ていると、「水清ければ魚棲まず」、という諺が出てくる。実際に主人公と深く係わる三人以外の登場人物は、彼を異端者として、別次元の人としてのような意味合いで見ているように感じられた。“滑稽”“まるで子供”“純粹”、彼を言い表した言葉だが、これを見ていると私は何故か大宰治の「人間失格」の主人公、大庭葉蔵の事を思い出した。公爵とは真逆の生き方のように見えるが、葉蔵と公爵には似たような雰囲気を感じる。正直両者とも、感動した、とか彼のように生きたい、といった感情は持てない。寧ろ彼らのような生き方をすることは私にはできない。でも、彼らを見ていると、人間らしさとは何なのだろうか、と改めて考えさせられる。公爵を潔白な人間、と言うのなら、私は多分卑劣な人間の方だと思う。そして公爵達と比べると私は平凡な人間であると思う。中学生の時はそれを理解しながらそれこそ公爵のような異端・非凡に憧れたものだ。だから四章の冒頭部の語りには共感するものが少なくなかった。登

## 2年 電気情報工学科 宮崎 愛美麗

場人物がヴリーラの葛藤・虚栄心・独創的な人間になろうという希望。平凡な人間だからこそその感情ではないかと思う。私の場合はそれがすぐ劣等感の方になる。いっそ、“ばか”になれたらいいのに、と思うが、それができないからこそ、私は凡夫である。

物語の人口は公爵に段々と惹かれていく。しかし私はロゴージンの方が何故か好きである。十字架を交わすまでの仲の公爵との間でナスターシャに終始振り回される、いわば悪友であり好敵手的存在だ。彼女のためなら金も厭わず、彼女が公爵に惹かれていることも知っておきながら、なおも彼女を愛し彼女に尽くす。それはもう狂気だとか病的な愛というものだろう。それゆえ終盤で彼女を殺してしまう所には本当に吃驚した。されに彼女の死体をベッドに寝かせ、公爵と共に三人一緒に一晩を過ごすのだ。まさに狂気の沙汰だと思った。最終的には見つかри、誰も報われないラストを迎えてしまう。この一晩こそが、彼らにとっての仕合わせだったのかと思うとなんとももどかしい気持ちで一杯になった。公爵のナスターシャに対する愛は哀れみからだと言われたが、ロゴージンの愛は歪んで見えるようでもとても強く真っ直ぐなものだと思う。まだ私は恋とか愛とかよく分からないし、こんな風に愛されたい、という訳ではないけれど、その狂おしい程の一途さに感銘を受けた。

名前は聞いたことがあるものの、今回初めてドストエフスキーの作品を読んだ。想像以上に難しく、読み終わるのに何日も費やした。私はロシア的、というのが分からないけれど、それでも得るものが多かった。得るものというのは人それぞれ違うけれど、それ自体は世界共通なのだ改めて実感した。最後にこの話での公爵達の恋愛模様は正直自分には早かったと思うので、もう少し大人になったら再び読み返したいと思う。

# 『枕草子』を読んで

「春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。——」

私が初めて清少納言の枕草子に触れたのは、たしか、小学生の頃。「春はあけぼの」で始まる有名な、枕草子の冒頭だった。NHKの教育番組で聞いたことはあった文章だったが、母が買ってくれた本で現代語訳を読んだ時に初めて文の意味が分かり、イメージすることができた。春の早朝の空から始まる。春夏秋冬。季節にこんな表し方があるのかと驚いた。それまで、古典には全く興味がなく、難しいものだと思い込んでいた。しかし、枕草子に出会ったことで古典に対する印象ががらりと変わった。その頃は、古語の意味が分からないものも多かったけれど、言葉の響きだけでも雰囲気があって、「日本語ってきれいだな」と思った。景色を想像すると、なんだか楽しかった。春から冬までの同じ所を何度も繰り返し繰り返し、声に出して読んだものを覚えている。

さて、今年の夏は「春はあけぼの」以外の文も現代語訳を通して読んだ。清少納言は好き嫌いがはっきりしている、とは聞いていたけれど、実際に読んでみると衝撃を受けた。「うつくしきもの」や「心ときめきするもの」などのプラスの印象を受けるものより、「にくきもの」や「かたはらいたきもの」のようにマイナスの印象を持つものの方が多かったからだ。つまり、好きなものよりも嫌いなものについての記事の方がより詳しく書かれ、細かく分類されているのである。このことは、冒頭文からは分からなかったことなので、インパクトが大きかった。嫌いな物について詳しく語っているのを「神経質だ」と思う人もいると思う。けれど現代では、嫌いなものを「嫌い」とか「やばい」とか「まじ何々…」などで済ませてしまっていたりする。それを考えると、「嫌い」一つでも色々な言葉で、ニュアンスで表現できる清少納言の語彙の多さに驚かされる。

また、原文の古語を読んだときに単語から想像した意味と、実際に訳した文を読んだ場合の意味の違いも面白いと思った。例えば、「すさまじきもの」と聞いた時、私は「凄まじい」だから、もの凄いとかが、恐ろしいというような意味かと考えた。けれども、本当

2年 物質工学科 上木崎 涼 香

は「不調和で興ざめなもの」という意味だった。こうして改めて調べなおしてみると、自分が普段使っている言葉も元の意味から外れているのかもしれないなと思った。

他にも、現代にはなく、初めて知った風習もある。物忌みや方違い等の陰陽道に関するものや生活に根付いた迷信など。宮中の様子と共に、今では風化してしまった当時の文化を知ることができるのも、随筆ならではのと思う。そしてやはり、清少納言といえば、歌である。歌に関しては、今までピンと来ていなかったため、清少納言が返歌をする場面を読んで、やっとその難しさや、清少納言たちの機転の良さが分かった。

作者の好き嫌いがはっきりしているせいか、「言いすぎなのでは？」というところもあったが、作者・清少納言の性格がよく表れているように思えたし、潔く感じた。お坊さんの居眠りにイライラしたり昼寝中に人が訪ねてきた時に煩わしく思う場面などは妙にリアルで共感できた。今とは違う文化もたくさんあるけれど、こうして見てみると、私たちにも通じるところがある。きっと、今の人も昔の人も同じようなことを思うのではないだろうか。「温故知新」という言葉があるけれど、まさにその通りだ。言葉について考える機会にもなった。あの時、最初に出会った古典が『枕草子』だったおかげで、古典を好きになれたのかな、とも思う。また、これをきっかけに他の古典も挑戦してみたい。



---

## 『風立ちぬ』を読んで

私はこの本を読んで、「幸福」とはなにかということを考えさせられた。私が「幸せ」と感じる時は、友達とはしゃいで笑っている時、おいしいものを食べている時、嬉しいことがあった時など、私は日々の生活の中でたくさん幸せを感じることもある。私はよく人から「毎日が楽しそうだね。」と言われる。そう言われるのは嬉しいが、反対に「みんなは楽しくないのだろうか。」と考えてしまう。勉強や人間関係など、たしかに大変なことはたくさんあるが、それでも私は毎日が楽しいと感じる。些細なことにも幸せを感じることができることはとても良いことだと思う。この本を読んで、幸福の形は人それぞれ違うということに気付いた。

この本は、病気の婚約者、節子と山の奥の診療所で暮らす若い小説家を主人公として描いている。風のように去ってゆく時の流れを一瞬一瞬感動的に表しながら描かれている。

「我々の人生なんぞというものは要素的には実はこれだけなのだ、そして、こんなささやかなものだけで私達がこれほどまで満足していただけるのは、ただ私がそれをこの女と共にしているからなのだ」という一文がある。主人公はこの文そのままの理由で毎日の同じような平凡な日々で幸福を感じていると思う。もし私が主人公と同じ立場だったら、愛する人がどんどん弱っていくところを見ながら、相手の体調に常に気を配りながら過ごしていてもそこから幸福はなかなか見出せないと思う。主人公は昔から、山奥で可愛いらしい娘と二人きりで愛し合いながら暮らすことが夢だった。それが叶って嬉しくて、幸福だと感じるのは良いことだと思う。しかし私だったら二人きりでいられなくても健康的でいられる方が幸福だと思う。主人公は

## 『小さき者へ』を読んで

「親の心、子知らず」ということわざがあるように親の気遣いというのは子供には伝わりにくいものです。しかし親は子供達に伝えたいことをあらゆる方法で、時には命がけで伝えていることをこの本を読んで知りました。その言葉は子供の人生を変えるものばか

## 2年 建築学科 尾前 楓

この幸福を、「いくぶん死の味のする生の幸福」と言っている。いつ死が来るか分からない死と隣合わせの生活だが、それがこの二人にとっての幸福なんだなと思った。また、私は、この主人公は恋人が病気で命も残り少ないということを悲しい現実ととらえるのではなく、前向きにとらえていると感じた。病気で命は残り少ないけど、こうしてずっと二人きりでいられることが私たちにとっての幸福である、と主人公は考えているだろう。

「皆がもう行き止まりだと思っているところから始まっているようなこの生の愉しさ」という言葉が本の中にある。普通の人だったら愛する人が病気になって、あとは死を待つだけとなったら、悲しみに明け暮れるだろう。しかしこの主人公はその毎日を美しく感動的に描いている。とても素敵なことだと思う。世界中のみんなが、この主人公のように些細なことでも、平凡な日々を幸福に感じる事ができれば、世界は愛に満ち溢れるだろう。

これからの人生、楽しいことばかりではなく、辛いことの方が多いただろう。でも、そこで、「私は不幸者だ。」と思わずに小さな幸せを見つけることができる人間になりたい。幸福の形は人それぞれだと思う。人にどう思われようが、自分の幸福は自分で探して自分で決めるものだ。逆に、他の人を見て簡単に、「あの人は不幸だ。」と決めつけないようにしたい。人生の長さは人によってちがうが、みんな死に向かって生きているのは同じなのでその人生の中でどれだけたくさん幸福を感じられるかが問題だと思う。私は一瞬一瞬を大切に、小さな幸福に気付ける人間になりたい。

## 3年 機械工学科 下出 哲大

りだと思います。

私の母親と父親は男四人兄弟を育ててくれました。時に厳しく、時に優しく精一杯の言葉を投げかけてくれました。私が中学のつらい部活で少し暗くなりがちだったときには、母は食事の世話をし優しく言葉をか

けてくれて、口下手な父は机の上に必死で考えたであろう父なりの言葉を書いてくれました。もちろん私の親のように言葉で想いを伝えてくれたらそれは素直に届くでしょう。でもこの本にでてくる父と母は、幼く、まだ言葉も理解できない息子達に向け、その想いを届けようとしていました。

結核にかかり、我が子の成長を見届けることのできなかった母親。私には、彼女が心に誓ったこの行為は正に母の優しさであり、そしてそれは病気であること以上につらいものだったのではないかなと思います。それは、結核が医者からつげられ息をひきとるまで、彼女は自分の子供、父とも会わないという決心をくつがえさなかったことです。私は彼女がのこしたという遺書の中の一節に、母親になった女性の強さと、そして計り知れない愛情の深さをしりました。

「母上は血の涙を泣きながら死んでもお前達に会わない決心を翻さなかった。」

母親の身を切るような思い、そして子を想う優しさが伝わってくる一文だと思います。病気の時こそ、心のやすらぎである子供に会わない。それは、病気をうつさないためだけでなかったと思います。日々、弱っていく自分の姿を幼い子供達に残してたくはなかった、死んでいく自分がそんな傷を残していくことはしたくなかった人だと思います。まさに自分の体で子供達を守ったそんな偉大な母に私は、自分の母も見えないところで見えない物から私を守ってくれているのか

と思うとどんな時も明るい母がありがたく思いました。

この本で父は、母が言葉にできなかった想い、そしてこんな大人になってほしいという願いを未来への手紙へという形で表しています。その言葉の中で私が心に響き、こんな父親になりたいと思った文があります。

「お前たちは私のたおれたところから新しく歩み出さなければならないのだ。ただしどちらの方向にどう歩まねばならぬかはかすかながらにもお前達は私の足跡から探し出す事が出来るだろう。」

私はこの文を読んで父とはどうあるべきかが分かったような気がしました。直接手とり足とり全てを教える必要はない、父親なら自分の失敗も経験も成功も見せて、道標となることだと思いました。父の歩んだ道を見て子供を成長させられたらカッコいいと思います。よく父の背中を見て育つといいますが、背中だけでなく足跡全てで語る人だと思いました。

私が将来、子供を持ったときどんなことを教えられるか考えたことがあります。教えられることというのは結局自分で見て経験したことしかありません。その中からいったい何割のことを伝えられるでしょう。それでも私は、いろんな方法で子供に自分の学んできたことを伝えたいと思います。私の父と母が私達を育てることをあきらめませんでした。私は父として、自分の後ろをつけてきてくれる子供達が私を追いこしその背中を見られるようになるまで父親でありつづけたいと思います。

## 『坊っちゃん』を読んで

3年 電気情報工学科 小松 晋太郎

「なんだかたいへん小さく見えた。」

これは男の子が、四国へ向かう汽車から見た清の様子です。遠くにいたので小さく見えるのは当たり前なのですが、この一文を読んだ時、自分は不思議な気持ちになりました。なんだか、妙に、物悲しくなって仕方ありませんでした。両親からもかわいがられず、兄も相手してくれなかったやんちゃで悪ガキの男の子を、小さい頃から優しくかわいがっていた清は一体この時、どんな気持ちで見送っていたのでしょうか。

初めて読んだ時は、清がどうして男の子をかわいがっていたのか、どうしてそんなに優しくするのか、理由がわからなかったのですが、何回も読みかえしているうちに、なんとなく分かってきたような気がしま

す。

なぜ清がそこまで男の子をかわいがるのか。それは、文章中にも書いてある通り、男の子が真っ直ぐで良い気性だったからなのではないかと思いました。しかし、その良い気性も、他の人からしてみれば、ただの悪ガキでしかなかったのでしょうか。清は、その悪ガキの裏を見抜いたのではないだろうかと思いました。見抜いたからこそ、この子は本当はいい子なんだということが分かり、小遣いをあげたくなったり、物を買ってあげたくなったりしたのではないかと思います。

ここで私は、ある疑問にぶつかりました。それは、清が男の子の性格を見抜いたのなら、身近にいた両親も見抜くのではないかということです。しかし、そ

れも、話を読んでいると無理だということが分かりました。なぜなら、父親は、男の子のことを知ろうとも見ようともしていませんでしたし、母親も、兄につきっきりだったからです。唯一、男の子に正面から向かっていた清だけが、男の子の中にある個性を見抜くことができたのだと思います。

では、逆に、男の子は清のことをどう思っていたのでしょうか。

私が思うに、男の子はきっと、とてもうれしかったのではないかと思います。人に好かれることのなかった子が、家族でもない他人に好かれ、自分のことを心から信じてくれている清のことが本当は、大好きだったのではないかと思います。

## 『沈黙の春』を読んで

農薬や殺虫剤などといった化学薬品は、現代の私たちの生活の中にありふれています。何気なく使っているその化学薬品は本当に安全なのでしょうか。この本は、化学薬品が原因で起こった環境問題について取り上げ、化学薬品の恐ろしさについて私達に強く訴えかけています。その現実私が想像している以上に残酷で凄じいものでした。

「虫も鳥もいなくなってしまう、冬眠からさめた虫や鳥動物達の鳴き声が聞こえない静かな春となった」という見出しから始まるこの本は、私の環境汚染に対する意識を変えました。全く無関係だと思い込んでいた環境汚染では、私の住む都城でも十分に起こりうる可能性があるということもありありと感じさせられたからです。

この本で取り上げられているのは、DDTと呼ばれる殺虫剤です。殺虫剤はもともととは人と人との戦いのために作られ用いられた兵器でした。その後、有害虫への農作物への悪影響を避けるために改良され現在の形となったのです。そのため、裏を返せば容易に殺人兵器になりうるというリスクがあります。しかし、その利便さから人々はリスクを無視してDDTを使い続けました。草や木のみを鳥などの小動物が食べ、それをまた肉食動物が食べるという食物連鎖の世界で、植物が汚染されればどうなるかは明らかです。またたく間に生態系は崩れ、その街は生気のしない「沈黙の春」を迎える結果になってしまいました。

人に信じてもらえること程、うれしいことはないと思います。信じることは、互いに心が通じあっていないとできないことだと思います。

男の子が四国へ行ってしまう時、清は本当はさびしかったと思います。「目に涙がいっぱいたまっている。」この一文から、清のさびしさが伝わってきました。

私は今回、人に信じてもらえる喜びや、人を信じる熱い思いを、この話を通して教えられた気がします。これから先、生きていく中で、人と接することは避けられないことです。だからこそ、一人一人と正面から向き合い、相手をよく知り、自分のことも知ってもらいながら、互いに信じあえる関係を、多くの人と持てればいいと思います。

## 3年 物質工学科 長倉小桃

この事実は決して他人事のように考えられませんが、現代の私達の生活の中に、殺虫剤も化学薬品もありふれているからです。だからこそ私は、この問題解決について真摯に取り組み生涯をささげたレイチェルの生き様にとっても感銘を受けました。どんなに時間がかかっても、どんなに他人から批判されても自分の信念を貫く彼女の姿勢は私も見習うべきであると強く感じました。

この本の第一章にこんな文章がありました。「たとえ不毛の世界となっても、虫のいない世界こそ一番いいと、みんなに相談もなく殺虫剤スプレーを決めたものは誰か。」まるで、環境汚染により死んでしまった、鳥や虫や草木たちの訴えのように思えます。私達人間の身勝手な行動によって引き起こしてしまった環境汚染を、同じあやまちを二度と犯してはならないと改めて考えさせられました。

私はこの本を読んで、学んだことが二つあります。一つめは、目先の利益ではなく将来の見通しを大切にすべきであるということです。これは普通の生活の中でも言えることだと思います。第一にこの本で取り上げられている環境汚染も、ただ収穫量を上げたいという理由で殺虫剤を使うという人間の身勝手な考えが引き起こしてしまったものです。このようなことを繰り返さないためにも、見通しを立て、しっかりと考えた上で行動することが大切であると感じました。

二目は、強い信念を持つということです。レイチェ

ルが訴えかけた化学薬品による環境汚染の問題はすぐに受け入れられるものではありませんでした。アメリカ政府や、有権者たちに批判されながらも自分の信念を曲げなかった彼女はとても尊敬できます。自分ももしそういう立場に立たされた時、はっきりと自分の意見を主張し、行動に移せるレイチェルのような人間に

## 『異邦人』について

小説は、主人公の感情が鍵である。読者は主人公に共感したり憤慨したりしながら物語を読み進めていく。一人称形式の小説なら尚更である。

しかしこの小説は例外だ。主人公に共感も憤慨も出来ない。はっきり言って、読み進めることが苦痛であった。

主人公ムルソーは掴みどころのない男だ。行動の描写は十分に描かれているのに、「読めない」のだ。

母親の死に悲しむ様子を見せないが、恨んでいるわけではなく、愛していた、という。目の経たないうちに女と仲良くなり、物語の佳境では結婚の約束まですることになるのだが、主人公からの明確な愛情表現は見られない。殺人の動機は「太陽のせい」だと答えるあたりでも、この主人公は「普通ではない」ことが窺える。のちに、裁判にかけられる場面では疲れているために適当に返事をする。死刑になった主人公は、自分は幸福であると確信する。

異常だ。しかし恐ろしいのは、読んでいる間は主人公の異常性をあまり感じなかったということだ。

たしかに、主人公の行動は普通とは言えない。しかしその感覚は、案外身近なところにあるものに近いような気がしたのだ。私たちが長期休暇の最中に曜日の感覚がなくなるように、主人公には倫理観が無いのだ。「太陽のせい」で殺人をおかした場面では身体的不快感が密に描かれている。主人公は自身の身体感覚を尊重している、とも言えるのではないだろうか。

この小説には、気になる箇所がいくつもある。広告や背表紙に書かれていた「不条理」という単語だ。

『異邦人』は、「不条理」小説らしい。私は納得できなかった。

『不条理』とは、道理に合わないことである。

たしかに、あらゆる面で道理に合わない小説だ。短期間しか付き合いのない女が求婚するほど主人公に好意を持ったことも、主人公の味方につく友人レエモン

なりたいたと思いました。

私は今、物質工学を専攻しています。そして将来、薬品を扱う会社に就職するかもしれません。だからこそ、化学薬品との向き合い方について深く考えさせられる作品でした。

## 3年 建築学科 川 畑 里 歩

も、善人だとは言い難い。

しかし私が違和感を持ったのは、主人公の主張がはっきりと見えないからだ。実現したいことがあるのに、司法や環境がそれを許さない、といった葛藤が「不条理」だと思っていたのだ。

その違和感は「不条理」を辞書で調べると解した。

「不条理」とは、人間と世界とのかかわり合いの中に現れる、人生の無意義・不合理・無目的な絶望的状况を言った語。参考・・・フランスの文学者カミュのことば。(現代新国語辞典より)

作者は心情ではなく、小説の全編を使って「状況」を描いたのだ。

それならば、納得ができる。いや、納得以上にしっくりくる。

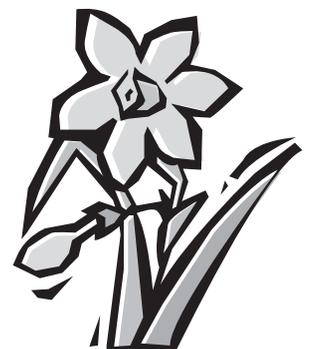
作者はきっと、敢えて読みにくいような、難しい文章を使っているのだ。

『異邦人』の作者であるアルベルト・カミュは小説家であり哲学者でもある。

彼は「小説」という入れ物を使って彼自身の世界を表現したのだ。

これこそが芸術だと思った。

映画でも絵画でも、大事なことは作者の表現したいものである。そのことに気付くことが出来れば、その作品をさらに楽しむことが出来るのではないだろうか。



## 平成 25 年度校内読書体験記コンクール入賞者

『采配』とは……………電気情報工学科

第 3 学年 前田太志郎

# 校内読書体験記コンクール入賞作品

## 『采配』とは

3 年 電気情報工学科 前 田 太志郎

「孤独に勝たなければ、勝負に勝てない。」

私が今回手に取ったのは、かつてプロ野球選手として活躍し、プロ野球史上唯一となる三度の三冠王を達成した落合博満が著した采配という本である。落合氏は中日ドラゴンズの監督に就き、すべての年でセ・リーグの三位以上をキープした名将であることから、野球好きの私としては読んでおきたかった一冊だ。

最初に書いた孤独に勝たなければ、という文章の中にも落合氏の孤独の考えが含まれている。自分が現役の頃と現在の環境が違うことを理解して若手への気遣いを欠かさないが、試合中は自分で何とかしなければならぬという考えだ。これはこれから私が人生を歩む上で必要とされる事だと思う。

仕事に就き、責任者として一人で取引先に行かされたりするかもしれない。しかし、そういった場面を乗り越えることで上司からの信用を得られるのだと思う。

「嫌われている、相性が合わないというのは逃げ道である。」

プロ野球界だけではなく、一般社会でもよく言われているが逃げ道を自分で作るのとは良くないと落合氏は述べている。

私も今まで環境が変わり接する人が変わったときに、すぐ相性が合わないと思ったりしていた事がある。しかし、こうして自分から決めつけると、人が自分の事を考えてくれていたりした場合など、成長出来る機会を逃してしまう。それならどうすればいいのか。それを落合氏は自分を客観的に見る事としている。これからは相性が合わない、自分は嫌われているのではないかと感じた時は一度冷静になり、客観的に自分を見てみよう。それによって相手から見た自分はどうか理解し、チャンスを逃さないよう出来るかも

しれない。

「明日の『予習』ではなく、今日経験したことの『復習』がすべて」

プロ野球の世界では、収集したデータによる予習があり重要なことだが、それ以上に打席に立って感じたことが最も重要な情報だと述べている。

これは学生である私達にとっても関係している事だ。勉強でも科目によってある程度の予習が必要な事があるが、だいたい科目で必要とされるのはやはり復習である。私自身、十分な復習が出来ているとは言えないが、今まで先生方からよく言われたり、経験上、重要性は理解している。ここでもう一度復習の重要性を知ることができたので、次は実践できるようにしていきたいと思う。

落合氏はポーカークフェイスが印象的だが、マスメディアや相手チームに腹の内を知られないためだと言う。何を考えているか分らなかった落合氏だが、本を通して考え方を知ってみるとリーダーとしてどうあるべきか、自分の下で働く人の使い方を自分の経験をもとに明確にしておき、こんな上司の元で働いてみたいと思った。

全体を通して感じた事は、監督時代に考えていた事を説明しながら一般社会の例を出しており、自分とそう遠い話では無いという事である。一つ一つの話の中に比較があって、この本から学び取ったことは将来の自分の為になると感じた。プロ野球の世界であろうが、企業の世界であろうが求められる物は共通しているのだと思う。この求められている物を采配という一冊を通して多く知る事が出来たので、これからの人生に少しでも役立てていきたいと思う。

例年、図書館では外部講師を招聘して、1学年を対象にした講演会を実施している。今年度も去る1月17日(金)、元熊本高専初代校長の宮川英明先生をお迎えして、講演会が開催された。講演の演題は「経験や自然から学んだもの」というもの。講演は次の3部から構成されている。1、「病気の経験から学んだこと」、2、「自然や他から学んだこと」、3、「高専の皆さんへ、期待をこめて」。宮川先生の講演は内容が凝縮されていること、しかも講演時間わずか40分という短時間の間に駆け足でなされたこともあって、この紙面でそれを再構成することは著者(望月)の力量では到底不可能である。また、その内容を網羅することは、かえって緊密に構成されている内容をかえって散漫なものにしてしまう恐れなしとしない。それ故、1と2に焦点を当てて紹介することとする。

宮川先生は冒頭の自己紹介で、高専の教員、その後の高専の校長として40年以上にわたって高専教育に携わってきた経験から、高専制度ほど優れた教育機関はないと力強く断言された。この言葉は誰よりも高専制度を知悉し、また誰よりも高専に愛着を抱いてきた先生の口から発せられた時、その言葉を聴いた1年生の耳には、「自分の高専への進路は決して間違っていなかった」という確信とともに、きっと頼もしいものに響いたに違いない。

続けて宮川先生は自身の生い立ちから話を始めたが、殊に高校3年の時に発病し、1年間休学を余儀なくされたことを語った。「なぜ自分だけが病気になり、闘病生活をしなければならないのか?」、「もし自分の人生が、誰かに養われて生きるような人生だとしたら、生きることに意味があるのだろうか?」これらは闘病生活のなかで宮川青年を襲った疑問であり、苦悩であった。その過程において宮川青年を「囚われから解放する言葉」との出会いがあった。先生は闘病中に聖書の通信講座を受講していたと言ったが、殊に宮川青年の心を捉えたのは「ゲッセマネの祈り」であった。先生は例えばと言って、マルコによる福音書の「父には能わぬ事なし。この酒杯を我より取り去り給え。されど我がこころのままを成さんとにあらず、御心のままに成し給え」をあげた。この言葉との出会いを先生は「ハンマーで殴られたような衝撃」と表現していた。この聖書の言葉との遭遇を機縁として、「何があろうとも、与えられた人生や運命を受け入れて、これからの人生を生きていこう」というのが、宮川青年の信条となった。宮川先生は病気を通して自身が気づいたこととして、次のように要約している。すなわち、「長い人生においては、喜びや悲しみも多いけれど、ときには困難や労苦が思わぬ形で降りかかることがある。苦しみや労苦は決して望むものでないが、自分を成長させ、心の底から幸せを感じる力を与えてくれるものである」。そして、後にはそれを「予期せぬ計らい」と名づけて、自作の座右の銘とするに至った。

また、先生は闘病中の読書体験にも言及している。休学中に多くの友人が色々の本を持って見舞いに訪れたが、それらを読んで読書の喜びを知った。その中でもドストエフスキーの『罪と罰』との出会いは宮川青年にとって特別のものであった。そして、後にはそれとの出会いを「予期せぬ計らい」と言っているから、宮川青年の心にドストエフスキーがいかに深い影響を与えたかが窺われる。なお、先生は講演の中でドストエフスキーのペトラシェフスキー事件による死刑宣告、そして刑執行直前の突然の恩赦、続いてシベリア流刑に触れたが、その時かつて自身が医者から「もし病気が治ったとしても30歳を過ぎたころだろう」と言われた経験を重ね合わせているように、私には思われた。

なお、先生は別のところで植村正久と並んで明治時代の最大のキリスト教思想家内村鑑三の「楯円の思想」をあげている。「自己を中心となさなければならない、しかし自己のみでは足りない。他をも中心となさなければならない」。

以上の叙述からも窺われるように、宮川先生にとって高校3年の時の闘病体験は、その後の先生の生存のあり方、方向を決定した原体験としての地位を担っている。先生は「自分はクリスチャンではないが………」と断っているが、人生の端緒において病気をしたことが、先生の生を宗教的なものにしたことは争えない。また、先生の講演のテーマは一言もってこれを覆えば「人生における苦難の意味」ということができると思うが、この問題

は殊にキリスト教が追求してきたテーマと通底するものがあるであろう。

また、先生は「石を抱いた樹はたくましい」といって、苦難の意味を人間の範囲に止どめないで、その範を自然の中にも求めている。そして事実、先生が講演の中である偶然からそういう苦難に遭遇しながら、その困難な境遇を克服してたくましく成長を遂げている樹木の写真を幾枚か紹介しているが、それは先生自ら撮影したものと思われる。「依存から自立への木」、数千年の命を育んできた圧倒的な存在感を示している「縄文杉」、「岩を支える木」などは、なるほどわれわれに何事かを教えている。先生は「時々遭遇する困難や苦勞、悩みこそが我々にとっての石ではないだろうか。その体験が人を強くて優しい風格ある大器に育てる」と述べているが、これらの写真はこのことの具体的形象化といってよい。

なお、先生の講演は更に第3部へと続くのであるが、叙上のごとくここで紹介を終えたい。殊に結論に相当する箇所を欠いていることは尻切れトンボの感を否めない。以上、甚だ蕪雑な紹介で宮川先生の真意を正しく伝え得たか心許ないのであるが、その点をご寛恕願いたい。

宮川先生の講演の聴講者の一人として、私は読書という間接的な体験とは異なって、改めて活人格に触れることの大切さを感じた。先生の講演の中身はすべて実地の体験から導き出されたもので、必ずや本校の学生が今後生きる上で貴重な糧になることは疑いない。

(文責・望月高明)



---

# 今年度の活動と図書委員会の在り方について

学生図書委員長：榎田 宗文

図書副委員長：山中 康成

今年度は、より多くの学生が図書館に足を運び、多くの図書に触れることを目標にして、活動を行ってきました。学生図書委員活動としては、テーマ展示、オープンキャンパスでの図書館開放の企画、ブックハンティング、そして今年度から「深山書評」といったものを中心に行いました。

テーマ展示は、各回ごとにテーマを決めて図書委員オススの本の紹介文を作成するというものです。映画・ドラマ・アニメ等の原作となった本を紹介する「原作本紹介」、読書の秋に合わせて各図書委員のオススの一冊を紹介する「図書委員オススの一冊」、冬から春にかけて、別れと出会いの季節に合わせて心が温まるような本を紹介する「心の温まる本」。このように様々なジャンルの本を計3回に分けて紹介しました。紹介文は、冊子体に製本して各クラスに配布したり、図書館の一角にコーナーを設けたりと工夫を凝らし、多くの人に手に取ってもらえるようにしています。

オープンキャンパスでの図書館開放では、足を運んだ中学生・保護者・その他一般の方々へ向けて、クイズラリー、本紹介、DVD上映会、閉架書庫ツアーの4つの企画を実施しました。クイズラリーは、図書館の本の中から出題されたクイズを解き、全問正解すれば菓をプレゼントするというものです。この菓は図書委員と司書の方で協力して作成しました。多くの方が参加し、菓がなくなってしまうほどに人気がありました。本紹介は、図書委員が「中学生に勧めたい1冊」を選び紹介するというものです。コーナーを設けて装飾をほどこしたこともあって、多くの中学生に手にとってもらえたと思います。DVD上映は、都城高専の図書館はDVDも所蔵していることを伝えるのと、多くのところに足を運んだ後の休憩所の意味合いも込めました。閉架書庫ツアーは、閉架書庫を図書委員が案内するというものです。蔵書管理のシステムを説明したり、可動式の本棚に触れてもらいました。普段立ち入ることができないということもあり、多くの人が関心をもって説明に耳を傾けていました。たくさんの企画を行ったことにより、多くの方が足を運び、都城高専の図書館がどんなところか知ってもらえたと思います。

11月の初旬にブックハンティングを宮崎市の鳶屋書店で行いました。今年度は例年より1時間長い3時間をかけ、各学科の専門書を中心に、計73冊の本を購入しました。各クラスの学生が希望した図書を購入することで、学生のニーズにあった本を図書館に配架できました。こちらの紹介文も小冊子を作成して、各クラスに配布しています。学生のみなさんには、是非一度手にとって読んでみて欲しいものです。

また、今年度から図書館の支援を得て、新たに「深山書評」という企画を創設しました。この「深山書評」はみなさんが図書館に足を運ぶ機会を増やして、より多くの本に触れて欲しいという図書委員の強い思いから発案され、企画したものです。「深山書評」の内容は、みなさんがブックレビューを書き、他の学生にお勧めの本を紹介するというものです。本を読み、レビューを書くことを通して、学生のみなさんがつながり、輪が生まれ、みなさんが本に触れる機会が増えると考えました。各クラスで図書委員に通知をしてもらったり、全校集会で呼びかけたりと、たくさんの宣伝を行いました。開催した時期の問題もあり、今年度はあまり応募作品は集まりませんでした。図書委員の活動通知、図書館に足を運んでもらう機会作りに多く役立ったと思います。

今年度の反省点としては、ブックハンティングの時期が遅くなってしまったこと、「深山書評」の応募数が少なかったことが挙げられます。これらについては改善点を話し合い、来年度はもっと多くの方が親しめるものになりたいと考えています。今年度は新しい企画をはじめとして、学生のみなさんに図書館に多く足を運んでもらえるように、いろいろなアイデアを出し、積極的に活動していくことができました。来年度は、今年度以上に図書委員が一丸となり、皆さんが心に残るような本を見つけられるよう活動をしていきたいと思っています。

## ブックハンティング実施される

平成25年度のブックハンティングが、11月2日(土)に全学年(1～5年)の学生図書委員15名が参加のもと、宮崎市の蔦屋書店で実施されました。蔦屋書店は一昨年12月にリニューアルし、50万冊にのぼる専門書・一般書などを取り揃えた宮崎屈指の大型書店です。

今年度は選書時間を1時間延長し、3時間をかけて行いましたが、学生図書委員は学科に関する専門書や就職に関する図書、美術書などさまざまなジャンルの図書を実際に手に取り熱心に選書していました。選ばれた73冊の図書は、新着図書コーナーのブックハンティングの棚に配架しています。また、購入した図書のブックレビューも作成し、展示しています。すぐに借りることができますので、是非、図書館にお立ち寄り下さい。次回のブックハンティングは、皆さんに少しでも早く図書をお届けできるよう、時期を早めて実施したいと考えています。



# ブックハンティングで購入した図書一覧

2013.11.2 実施

書名	著者名	出版社	請求記号
7つの言語 7つの世界 : Ruby, Io, Prolog, Scala, Erlang, Clojure, and Haskell	Tate Bruce	オーム社	007.64  Tat
C# の絵本 : C# が楽しくなる 9 つの扉	アंक	翔泳社	007.64  アंक
世界でいちばん簡単な VisualC# の e 本 : VisualC# の基本と考え方がわかる本	金城 俊哉	秀和システム	007.64  キョウ
最強マフィアの仕事術	Franzese Michael	ディスカヴァー・トゥエンティワン	159  Fra
日本語のルール : ビジネスで恥をかかない	白沢 節子	日本実業出版社	336.47  シバ
女子学生のための最強の就職面接 : '15 年版	成美堂出版	成美堂出版	377.9  シユウ  2015
乱択アルゴリズム	結城 浩	ソフトバンククリエイティブ	410.4  ウチ
ゲーデルの不完全性定理	結城 浩	ソフトバンククリエイティブ	410.4  ウチ
線形代数 : 明解演習	小寺 平治	共立出版	411.3  コジ
微分積分 : 明解演習	小寺 平治	共立出版	413.3  コジ
iPS 細胞の世界 : 未来を拓く最先端生命科学	山中 伸弥	日刊工業新聞社	491.11  iPS
一歩先を行く集中力	佐々木 豊文	明日香出版社	498.39  ササ
カーボン : 古くて新しい材料	稲垣 道夫	森北出版	501.48  イカ
自然エネルギーの可能性と限界 : 風力・太陽光発電の実力と現実解	石川 憲二	オーム社	501.6  イカ
おかしな建築の歴史 : Architectural Keyword 125	五十嵐 太郎	エクスナレッジ	520.2  カシ
建築のエッセンス	斎藤 裕	A.D.A.Edita Tokyo	520.4  サイト
「RC × S × 木」構造デザイン入門		エクスナレッジ	524  RC
世界で一番美しい建築デザインの教科書 : 7 人の巨匠に学ぶインテリア・家具・建築の基本	鈴木 敏彦	エクスナレッジ	525.1  スズキ
光の教会 : 安藤忠雄の現場	平松 剛	建築資料研究社	526.19  ヒラマ
スモールスペースのアイデア ; 2	Crafti Stephen	グラフィック社	527.1  Cra  2
建築家が語る「和」の極意	泉 幸甫	エクスナレッジ	527.1  イミ  1
最高に楽しい「間取り」の図鑑	本間 至	エクスナレッジ	527.1  ホンマ
現場情報を図面に盛り込むテクニック	山田 学	日刊工業新聞社	531.9  ヤマダ
クルマ好きのための 21 世紀自動車大事典	下野 康史	二玄社	537  カ
ゼロ戦 100 の謎	円道 祥之	宝島社	538.7  イト
脱原発と自然エネルギー社会のための発送電分離	e シフト	合同出版	540.9  エ
よくわかる最新レアメタルの基本と仕組み : 用途、製造技術、応用技術の基礎知識 : レアメタルの常識	田中 和明	秀和システム	565.8  タナカ
現象から学ぶ燃焼工学	田坂 英紀	森北出版	575.1  タサカ
ゲームクリエイターが知るべき 97 のこと	吉岡 直人	オライリー・ジャパン	589.7  ギョウ
腕のいいデザイン事務所で修業しないとふつうは身につかない知識と技と心得 ; [1]	MdN 編集部	エムディエヌコーポレーション	674.3  ウデ   1
腕のいいデザイン事務所で修業しないとふつうは身につかない知識と技と心得 ; 2: レイアウト / 書体 / 印刷編	MdN 編集部	エムディエヌコーポレーション	674.3  ウデ   2
売れる色はこう決める ! : カラーマーケティング 50 選	日経デザイン	日経 BP 社	675  ウキ
イラストで読むレオナルド・ダ・ヴィンチ	杉全 美帆子	河出書房新社	702.37  スギ
神のごときミケランジェロ	池上 英洋	新潮社	723.37  イケガキ
誰も知らないラファエロ	石鍋 真澄	新潮社	723.37  イシノ
世界地図の下書き	朝井 リョウ	集英社	913.6  アサイ
さいとう市立さいとう高校野球部	あさの あつこ	講談社	913.6  アサノ
渾沌王	化野 燐	講談社	913.6  アサノ
呪物館	化野 燐	講談社	913.6  アサノ
ロスジェネの逆襲	池井戸 潤	ダイヤモンド社	913.6  イケイ
死神の浮力	伊坂 幸太郎	文藝春秋	913.6  イサカ
微睡みのセフィロト	沖方 丁	早川書房	913.6  ウキ
王様ゲーム ; 滅亡 6.11	金沢 伸明	双葉社	913.6  カナザ   5
王様ゲーム ; 起源	金沢 伸明	双葉社	913.6  カナザ   6
王様ゲーム ; 再生 9.19	金沢 伸明	双葉社	913.6  カナザ   7
バトル・ロワイアル ; 上	高見 広春	幻冬舎	913.6  タカミ   1
バトル・ロワイアル ; 下	高見 広春	幻冬舎	913.6  タカミ   2

書名	著者名	出版社	請求記号
超高速! 参勤交代	土橋 章宏	講談社	913.6   トハ
SPEC ; 1	西荻 弓絵	角川書店	913.6   トサ  1
SPEC ; 2	西荻 弓絵	角川書店	913.6   トサ  2
SPEC ; 3	西荻 弓絵	角川書店	913.6   トサ  3
偽物語 ; 上	西尾 維新	講談社	913.6   ニオ  1
偽物語 ; 下	西尾 維新	講談社	913.6   ニオ  2
死なない生徒殺人事件 : 識別組子とさまよえる不死	野崎 まど	アスキー・メディアワークス	913.6   ナ
なにかのご縁 : ゆかりくん、白いうさぎと縁を見る	野崎 まど	アスキー・メディアワークス	913.6   ナ
星がひとつほしいとの祈り	原田 マハ	実業之日本社	913.6   ハカ
ライオンの棲む街	東川 篤哉	祥伝社	913.6   ヒガ
ウインクで乾杯 : 長編本格推理小説	東野 圭吾	祥伝社	913.6   ヒガ
影法師	百田 尚樹	講談社	913.6   ヒヤ
ぼくたちと駐在さんの700日戦争 ; 1	ママチャリ	小学館	913.6   マチ
ロマンス小説の七日間	三浦 しをん	角川書店	913.6   ミラ
政と源	三浦 しをん	集英社	913.6   ミラ
リーガル・ハイ	古沢 良太	扶桑社	913.6   ミヒ
その青の、その先の、	椰月 美智子	幻冬舎	913.6   ヤ
ゲート : 自衛隊彼の地にて、斯く戦えり ; 外伝式黒神の大祭典編	柳内 たくみ	アルファポリス	913.6   ヤイ  S2
93 番目のキミ	山田 悠介	文芸社	913.6   ヤマ
ボトルネック	米澤 穂信	新潮社	913.6   ヨサ
原発ホワイトアウト	若杉 冽	講談社	913.6   ワカ
12 星座小説集	群像	講談社	913.68  12セ
運命の人はどこですか?	飛鳥井 千砂	祥伝社	913.68  ウメ
馬医 ; 上	キム イヨン	二見書房	929.13  キム  1
馬医 ; 中	キム イヨン	二見書房	929.13  キム  2
馬医 ; 下	キム イヨン	二見書房	929.13  キム  3

## 図書館からのお知らせ

### 図書館開館予定について

今年度の夜間開館は、2月28日(金)までです。  
次の期間は、平日のみ開館します。

期 間 : 3月4日(火)から3月31日(月)

開館時間 : 9時から17時まで

(なお、平成26年度の開館予定は、4月2日(水)開始予定です。)

### 学年末・春季休業中の長期貸出について

通常10日間の貸出期間を学年末並びに春季休業中は、  
長期貸出とします。

貸出開始日 : 2月19日(水)

返 却 日 : 4月7日(月)始業式

帯出冊数 : 7冊



## 編/集/後/記

今回の図書館だよりは、本年度をもって退職される黒木先生から玉稿をお寄せいただきました。ご多忙中のところご協力いただきまして、誠に厚くお礼申し上げます。

講演会(1年生対象)は、講師に宮川英明先生(元熊本高専校長)をお招きしまして、「経験や自然から学んだこと」と題して、先生自らの体験談をご講話いただきまして、学生は静かにシンミリと聞いていましたので、学生の心に響いたと思います。

また、本号には、校内読書感想文・体験記コンクールの入賞作品を掲載しました。入賞作品は1年生~3年生の作品から選ばれた力作揃いで、昨年12月の全校集会で表彰されたものです。ご多忙中、学生の読書感想文をご指導下さいました国語科の先生方に厚くお礼申し上げます。